

仲間と共に栽培

今年で就農30年目を迎え、家族で大豆72ha・水稻7ha・ねぎ80aを栽培する、大塚忠之さん。減反対策で始めた大豆栽培ではありましたが、その栽培の奥深さに魅せられ、年々作付け面積を増やしています。

「面積の拡大に伴い、個人での栽培には限界があると考え、周囲の農家と相談して、



河戸川大豆組合（3名）という組織を作りました。これにより、栽培情報の共有化や薬剤の統一、そして農業機械の共同使用が可能になり、作業の効率化が大幅に図れました。特に昨年は11月上旬からの長雨と早めの降雪により、刈り取り出来ない圃場も出たため、今年には収穫から逆算した栽培を行い、11月8日には全ての圃場で収穫を終えることが出来ました。」

防除徹底を心掛ける

近年の異常気象の影響により、春先の低温や夏の猛暑、また干ばつに集中豪雨など、農作物の管理はより厳しさを増しています。大豆栽培においては、排水対策や病害虫防除に向けた除草対策が重要になります。

「病害については、播種時点で行政の補助を利用した薬剤を使用することで、発生をかなり抑えることが出来ています。害虫については、除草作業を計画的に実施するとともに、無人ヘリによる防除を適期に行い、害虫の大量発生を未然に防いでいます。また健全な根の育成のために、堆肥や土壌改良剤を施用して地力向上を図り、定期的な圃場の回転で連作障害を防いでいます。」

地域で農業を守る

自家調製は手間がかかる分、どの圃場でどのような被害粒が出ているかが確認できるため、大塚さんはJA営農

指導員や部会の仲間たちと相談して、より良い栽培方法を毎年模索しています。

「仲間同士の情報交換を積極的にを行い、人の意見をきちんと聞くようにしています。また農業を取り巻く情勢が大きく変化しているので、地域で話し合っって農地の集積などを行いながら、地域農業の維持・振興を目指していきたいと思えます。」と力強く話してくれました。

